

2023年8月15日聖母の被昇天ミサ説教（宝塚教会）

被昇天の聖母を保護者に仰ぐここ宝塚教会で今日ごミサを捧げるのは大きな喜びです。今宝塚教会では屋根の雨漏りの修理についての検討が始まっていますが、これまでに何回も行われた際の資料を目にする機会がありました。そこには私も存じ上げている神父様や信者さんたち数名のお名前もありました。すでに天国に行かれた方もおられます。これまでこの教会にかかわってくださったすべての方々への感謝と、今ここに集う皆様と、これからこの教会をになつていく人たちのためにごミサをお捧げしましょう。

聖母の被昇天の福音朗読は、「マリアの賛歌」です。この賛歌は前半と後半ですこし趣が異なるものです。それについて、2006年に当時の教皇ベネディクト十六世が解説をしてくださいました。次のように述べられています。

前半（ルカ1・46－50参照）は、天におられる主へとささげられる、独唱者の歌声のようです。…「わたしの魂は……、わたしの霊は……、わたしの救い主を……、わたしを幸いな者というでしょう、……わたしに偉大なことをなさいましたから」。この祈りの中心は、神の恵みへの賛美です。

マリアの賛歌は、まず賛美と感謝と喜びです。私たちの日々の祈り、言葉はどうでしょうか。暑ければ文句を言い、台風が来れば愚痴を言い…ではないでしょうか。上島鬼貫（うえじま おにつら）という俳人がいます。芭蕉と同時代で互いに知り合いで、東の芭蕉、西の鬼貫と言われました。伊丹出身で伊丹市では毎年鬼貫顕彰俳句大会が行われています。独特のユーモアのある句が多いのですが、代表句にこういうのがあります。「冬はまた夏がましじゃといいにけり」どんなときも賛美と感謝と喜びの心でいるのは大切です。

前半は聖マリアの独唱…と表現されたベネディクト十六世は、こう続けられました。

後半（51－55節参照）は合唱の調子で述べられます。あたかも、神の驚くべき選びのわざをたたえるために、信じる者の共同体の声がマリアの歌声に加わったかのようです。歴史の主であるかたが何かをするときの「やり方」がはっきりと示されています。主の計画は、しばしば隠れていて、「思い上がる者」、「権力のある者」、「富める者」が勝利を収めますが、主の隠れた力は、ついには、どのような者を神が真に喜ばれるかをかならず明らかにします。すなわちそれは、「主を畏れる者」、つまり神のことばに従う者、「身分の低い者」、「しもベイスラエル」です。「しもベイスラエル」とは、マリアのように、心が清く単純な「貧しい者」から成る、神の民の共同体のことです。
（教皇ベネディクト十六世 2006年2月15日、部分）

第1朗読では、「一人の女」として聖母マリアのことが語られました。第2朗読では「一人の人」としてキリストのことが語られました。そのいずれも「一人」で終結するのではなく、全人類への恵みにいたる人となりました。

今日の朗読は、被昇天の聖母から私たちに示されたこれからの歩み方です。自分のことではなく、神様のことを考えて喜びのうちに賛美する、自分のことではなく、神の民全体（その過去・現在・未来という時間や、人種や国境を越えたすべての民）のことを考えて、希望と信仰と愛を持つことです。WYDに参加した若者たちが、世界から集まった150万人の若者との交流で感じ取ったことはそれでした。神様はすごい！カトリック教会はすごい！信仰はすごい！みんなはすごい！

このミサを通して、聖母マリアの母なる取次を願い、神様への賛美を捧げ、すべての人たちのために祈りましょう。